



中野絣隆盛の時代に誕生した赤レンガ倉庫。誕生した時代背景と赤レンガ倉庫の歴史秘話について、邑楽町文化財保護調査委員の大塚孝士さんに、解説していただきました。

## 大正時代に中野絣の工場として建てられた赤レンガ倉庫

中野絣は、明治以降急速に発展。大正期、木綿の白絣としては「西の大和絣（奈良県大和高田市）、東の中野絣」と並び称され、日本を代表する夏向けの木綿絣として発展しました。記録によると、大正8年には生産額1,200万円（この時代の1円は現在約775円として93億円）を数える盛況でした。大正12年には、242万反（1反は成人1着分の布）を生産し、最も隆盛を極めました。

大正8年、機屋の高沢善太郎氏が「中野銀座通り」に面した屋敷内に15間半×7間（約28×13メートル）の赤レンガ壁の工場（現・赤レンガ倉庫）を建てました。中野絣からさらに毛織物の需要を見越して、次の

時代を先取りしてのことでした。しかし、工場の竣工後すぐ織機を導入して稼働したわけではなく、途中関東大震災に遭遇。その後、中野絣の査定場として利用されました。各地から賃機により集められた製品を、いったんこの赤レンガ倉庫に集め、厳しい査定分けをした後、全国各地に配送。そのまま昭和に入り戦時色が強くなる中、中野絣は昭和13年を境に「織物等製造制限」の統制経済に規制され、大打撃をこうむることになりました。

中野絣全盛期の大正6年には、館林小泉間の中原鉄道が開通。この時の停車場（駅）は、光善寺下谷の官林（国有林）内にあり、そこからほぼ直線に現在の光善寺神明宮付近を通って、前原の浅間神社直前で現在の軌道に続いていました。この停車場設置については、当初から中野絣産業の繁栄を無視しているという多くの異論が持ち上がり、大正11年5月より現在の横町化案に本中野駅として移転しました。

大正7年5月には中野村に電信・電話が開通し、中野郵便局で業務が開始。その時の電話加入者は中野本村と鶴を基点に中野郵便局が1番、機屋の小島貞次郎氏が2番、赤レンガ工場主の高沢氏が3番などと機屋・紺屋の人々でした。それから8年後に中野小学校により、電話が取り付けられたのです。

この中野絣繁栄時代に、現在の群馬銀行東西の通りをだれ言うことなく「中野銀座通り」と呼ぶようになります。大正11年には久保電司氏がフォード車を購入し、ハイヤー事業を開始。館林駅を拠点に乗合自動車路線が、各地に張り巡らされていくのもこの時期でした。そして、大正14年には赤レンガ倉庫付近に、芝居興行場（映画館・劇場）中野クラブが機屋・紺屋で働く人たちの慰安と娯楽を目的に営業を開始しました。時を同じくして、主要地方道「足利邑楽行田」線、一般県道「赤岩足利」線が次々に整備されました。

## 大正、昭和、そして平成と赤レンガ倉庫の歴史的意義を 探るなかで、見えた「まちの歴史」

## History 歴史をひもとく

赤レンガ倉庫は、中野絣の最盛期を物語る遺産である。



【案内人】邑楽町文化財保護調査委員・大塚孝士さん

赤レンガ倉庫は、「中野銀座通り」のシンボルとして93年の月日を刻んできた近代産業遺産です。大正8年の建築当時ノコギリ屋根であったことが、今回の調査で分かりました。さらに現地調査を進めていくうちに、北東と北西隅の2か所のレンガの積み方から、まだまだ建物を継ぎ足そうと事業の拡張を夢に描いていた意気込みの痕跡を、目にすることもできます。



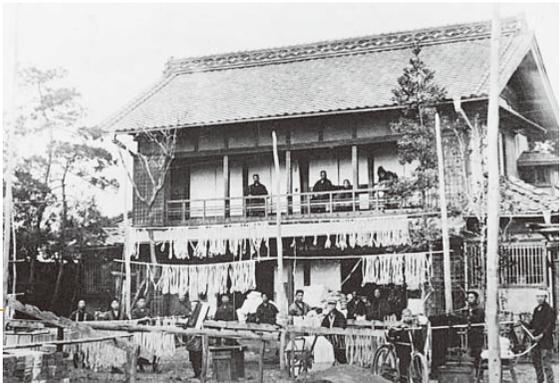
中野絣起源地之碑→  
当時、邑楽織物同業組合の事務所があった場所に、昭和6年3月に建てられました。旧役場駐車場内に現在も立っています



中野絣機屋のようす  
「機屋」は原糸を購入し、製織の準備を済ませ賃機に出し、さらに賃機の製品を取りまとめて、完成品として必要な工程を終のち、販売ルートに載せる経営者です（写真・「邑楽町誌基礎資料 第十三号 中野絣」邑楽町誌刊行委員会より）



←赤レンガ倉庫東側



まちの歴史再発見企画

# 紅に光り輝く遺産

赤レンガ倉庫の物語

中野地区にある赤レンガ倉庫。「ふだんから見慣れた建物」だと思ふ人もいるかもしれませんが、その佇まいは時を刻み、今年で誕生から93年。それは、中野絣の最盛期に誕生し、現在も姿を残す大正時代の「わがまちの近代産業遺産」です。今月号の広報おうらでは、まちの歴史再発見企画として、「赤レンガ倉庫」の歴史をひもときます。

### 唯一無二の伝統工芸品——中野絣



「中野絣」は、中野村を中心として生産された木綿の白絣のことをいいます。その起源は江戸時代ともいわれます。中野絣発展に大きく寄与したものに、賃機制度があります。織り子（主に農家）が機屋から織り機と原料の糸を借り受け、反物に織り上げて製品として納めます。その手間賃として現金を受け取るという制度でした。当時の農家にとって、貴重な現金収入にもなり、機屋にとっては人気のあるデザインの在庫を抱えず、必要な分だけ生産することができました。

「くだ巻機」→糸を巻きつけるときに使う



「はたし」→機織りに使う道具



# 大正建築をそのままに 戦後生まれ変わった 赤レンガ倉庫

ノコギリ屋根から  
見た時代の潮流

## 戦争の影、そして戦後――

昭和16年12月8日、日本軍の真珠湾攻撃により幕を開けた太平洋戦争。敗色の色が濃くなり始めた昭和18年、赤レンガ倉庫は中島飛行機の軍用物資保管庫の疎開場所となっていました。

終戦後富士産業（現・富士重工業）が、主に化学薬品の保管倉庫として活用。社員4人が厳重に管理にあたり、宿直も交替で行われていたほどでした。

昭和24年には倉庫の売却話が持ち上がりましたが、戦後の混乱でだれ一人手を出さずがいません。床は、軍用物資倉庫の時に乱雑に酷使されたせいか、コンクリートであったにもかかわらず、でこぼこになっていました。

その後、完璧に修理をし、昭和27年ごろには約358㎡(217畳)の広さを活用し、「中野ローラースケートリンク」が開業。数年間、子どもたちや若者たちにとっての娯楽の殿堂として、繁栄

も見せました。しかし、その中野

ローラースケートリンクも長続きせず終わるにつれ、その後短い期間ですが空手道場として使用された時期もありました。

また、有志によってパチンコ遊技場の計画も持ち上がりましたが、発案者以外に同調する人が集まらず、資金不足から計画途中で頓挫してしまいました。

## ノコギリ屋根を大改装

昭和30年、赤レンガ倉庫は土地とともに売りに出されました。多くの地域有力者に話がありました。が、大きすぎるし、改装するのに木造でないため、出資がかさむことを懸念されていました。

昭和31年、中野農業協同組合が取得し、食糧管理制度のもと米麦の保管倉庫として、政府指定倉庫の認可を取得するため大改装を行いました。これまでの三連のノコギリ屋根を取り払って、かさ上げし、すべての開口部(出入り口窓

をふさぎ、現在の切妻屋根に改装したのです。赤レンガ倉庫は、改装により機密性も高まり、煙蒸消毒の効果や火災にも強いことなど好条件がそろった建物として生まれ変わりました。

倉庫（当初は中野緋の工場）が誕生したのは、その中野緋が取引額も最高額を数えた隆盛のとき。戦後、「中野ローラースケートリンク」や「空手道場」などを経て、大改装を遂げたにもかかわらず、時代の流れとともに現在は倉庫としての役割を終えています。

しかし、平成7年の食糧管理制度の終焉を契機に、赤レンガ倉庫は、事実上その役目を終えることになったのです。

今回、大塚さんの解説により、ひとつの近代建造物から時代背景や、歴史秘話まで知ることができました。赤レンガ倉庫は、中野緋の隆盛と衰退、戦争、そして戦後の復興から現在に至るまで、時代の潮流を見つめ続けてきた近代産業遺産といっても過言ではないかもしれません。

## 赤レンガ倉庫に映る 町の近代史「取材を終えて」

文化財保護調査委員の大塚さんによると、中野緋の取引先には東京の大手デパート、あの「三越」の名もあつたそうです。赤レンガ



↑倉庫の南側、東側、西側には雨どいを支える金具が残っています。金具の配置からノコギリ屋根があつたことの証明のひとつとなっています  
↑南側レンガ壁には「中野ローラースケートリンク」の文字が今も見えます。昭和27年ごろ、スケートリンクとして活用されていた痕跡が残っています



↓ノコギリ屋根の跡、ノコギリ屋根を支える8本の柱を撤去し、レンガ壁をさらにレンガ・モルタル・木骨柱でかさ上げ。屋根のトップには2台換気扇を設置。従来の開口部（出入り口南側1・東側1、アーチ状窓東側1・南側4・西側3）をレンガ・モルタル・大谷石を使い分けて、ふさぎました



↑赤レンガ倉庫（天王元宿・5区）。中野緋が隆盛を極めた大正8年に誕生。当時この辺りは「中野銀座通り」と呼ばれていました  
→北東と北西隅のレンガの積み方から、増築計画があつたことが分かります

## 懐かしい思い出の追憶

「中野スケートリンク」でアルバイトをしていました。私が19歳のころだったと思います。当時、訪れるお客さんの大半は、子どもや若者たちでした。仕事内容は、代金と引き換えにローラーシューズを入場者に貸し出すというものでした。営業終了後、でこぼこになったリンクをセメントで修繕したこともあります。何より私もズボンがすり切れるくらい転びながら、ローラースケートを楽しんだ一人です。

「中野クラブ」でもアルバイト経験があります。映画館の入場券のもぎりをしていました。懐中電灯をかざしながら、お客さんを客席まで案内したことや、映写技師の人に教えてもらい映写機を操作したこともあります。売店の売り子には、粋なおばあちゃん。どれも懐かしい思い出になっています。



↑中野クラブのようす。当時は芝居の興行や、有名歌手も出演したほどの活気がありました。地元住民による「のど自慢大会」なども開催されたそうです（写真提供・小島美子さん）

## Interview



木村 稔さん  
(天王元宿・5区)

驚きの「中野ローラースケートリンク」  
赤レンガ倉庫が「中野ローラースケートリンク」として営業していたのを知って、驚きました。東京にいたころ、よくローラースケートをして遊んでいたの、懐かしいですね。



田岡 衛さん  
(新中野・33区)

赤レンガ倉庫にまつわる歴史を再発見  
今回の見学会で、赤レンガ倉庫について、詳しく知ることができました。中野緋が繁栄した時代の歴史を改めて実感できて、自分の町の歴史を再発見したような気がします。



廣田和男さん  
(石打・20区)

町の歴史でも知らないことは多いですね  
ただ古い建物という印象で今まで見ていました。今回の見学会で、改めて歴史を刻んできた貴重な遺産であることを実感。町の歴史でも自分たちが知らないことは多いと思います。



清水千代子さん  
(新中野・33区)

幼いころみた見た機織りの情景を思い出しました  
邑楽町に越えてきて38年。初めて赤レンガ倉庫の歴史を知ることができました。足利市にある私の実家では昔、機織りの仕事をしていました。中野緋の話を知ること、幼いころ見た機織りの情景を思い出しました。



↑7月6・7日、町教育委員会主催で「赤レンガ倉庫見学会」が行われ、参加者は大塚文化財保護調査委員の解説に、熱心に耳を傾けていました



↑広大な倉庫内358㎡(217畳分)。年間を通じて室温・湿度ともほぼ一定。猛暑時も涼しさを感じます